

---

# 身体教育という近代

文部省『百科全書』の翻訳語から見えるもの

---

NAGANUMA Mikako

長沼 美香子

## 1. はじめに

私たちの「歩く」「走る」「泳ぐ」をはじめとする基本的な身体動作は、明治期に大きく変わった。三浦雅士『身体の零度』（講談社、1994）も論じているように、日常的な身体動作さえ、現在のそれは明治以降における近代化によってもたらされた結果なのである。ありふれた身近な動作なので気づきにくいですが、私たちの身体動作は近代日本に導入された「身体教育」によって矯正されたのだった。和服を着たときの所作、ナンパ走り、日本泳法など伝統的な身体動作を思い浮かべてみれば、それらが特別な有標性を帯びて、現代の日常的な身体動作と切断されていることは明らかであろう。

近代における身体の問題系は日本にのみ現象しているわけではない。例えば、社会学者のノルベルト・エリアスは、暴力と文明の対立軸から19世紀の英国におけるスポーツと議会制度を「文明化の過程」のなかで同時代的に発生したものとした。近代スポーツは近代社会が生み出した身体ゲームであり、議会は近代国家のための政治ゲームなのだ。また、近代教育と結びついた身体の「規律・訓練」は、ミシェル・フーコーが指摘するところとしてよく知られている。さらに、フィリップ・アリエスによれば、中世ヨーロッパにはなかった「教育」は、「子供」とともに近代に誕生したことになっている<sup>(1)</sup>。

しかしながら日本においては、「身体教育」が明治初期にphysical educationからつくられた翻訳語であること、sportの翻訳漢語が遂に成立しなかった事情なども記憶しておいてよい。本稿では、私たちの身体が規律・訓練を経て文明化された過程を、明治期日本の翻訳の出来事として捉えなおしてみたいと考えている。具体的には文部省『百科全書』の読解を通して近代日本の身体と教育をめぐる翻訳語に焦点をあてることで、何が見えてくるのかを探る。

## 2. 明治政府の教育

### 2-1. 文部省『百科全書』と「教育」

廃藩置県が断行された4日後の1871（明治4）年7月18日に、「大学ヲ廃シ文部省ヲ被置候事」という太政官布告で急設された文部省は、杉村武『近代日本大出版事業史』（出版ニュース社、1967）も述べているとおり、明治初期の出版活動の中心でもあった。1873（明治6）年から83（明治16）年頃にかけて文部省が印行した『百科全書』は、英国ヴィクトリア時代に出版活動を展開し活躍した

---

(1) エリアス（Norbert Elias: 1897-1990）の『文明化の過程』（法政大学出版局、1977-78）、フーコー（Michel Foucault: 1926-84）の『監獄の誕生』（新潮社、1977）、アリエス（Philippe Ariès: 1914-84）の『〈子供〉の誕生』（みすず書房、1981）や『〈教育〉の誕生』（新評論、1983）など参照。

チェンバーズ兄弟の編纂による *Chambers's Information for the People* を翻訳した「百科事典」である<sup>(2)</sup>。文部省『百科全書』は大規模な国家的翻訳プロジェクトであり、文字通り百科全書的な内容が多数の洋学者によって日本語へと訳出されて、和漢学者の校訂後に順不同で出版された<sup>(3)</sup>。

この国家事業を企図した中心人物のひとり、文部省に出仕していた箕作麟祥(1846-97)であった。彼は自ら *Education* と *Natural Theology – Ethics* という2編の翻訳を担当したが、ここで取り上げたいのは *Education* とその翻訳書である。

*Chambers's Information for the People* の1項目である *Education* の箕作麟祥訳は、1873(明治6)年9月にまず「教導説」として出版された。これは、全91編の文部省『百科全書』のなかで2番目に早い刊行であった。上下2冊の和装本の「教導説 上篇」の巻頭には、「百科全書叙」(古屋矯)や「凡例」「緒言」も付されており、他編と比較して明らかに別格扱いである。『百科全書』全編のなかで *education* をテーマとした本書は、明治政府の文部省にとって特別な位置づけにあったと思われる。また、校訂者の記載もなく、この翻訳事業における箕作麟祥の存在が際立った翻訳書である。明治初期の教育思想を論じるなかで稲富栄次郎は、「箕作麟祥訳『百科全書 教導説』を以てその嚆矢」とし、「本書は当時相当に読まれたものと思われる」と一定の評価をしている。そして「教導説」は、「わが国においてエデュケーション、即ち教育の意味を語源的に説明した最初のものであり、従って西洋的な教育の意味をわが国に紹介した最初のものであると言うことが出来る」と述べる(『明治初期教育思想の研究』福村書店、1956、219-220頁)。ここで「教導説」を取り上げながらも、稲富が不用意にも「エデュケーション、即ち教育」と書いてしまったのは、「*education* = 教育」という翻訳の等価が私たちの無意識の奥深くに成立している証左であろう。箕作が紹介した「西洋的な教育の意味」とは何であったのか。

## 2-2. 箕作麟祥訳「教導説」から「教育論」へ

箕作麟祥訳「教導説」は、刊行から5年後の1878(明治11)年には編名を「教育論」に改訂している。*education* の訳語がなぜ「教導」から「教育」に変わったのかを問うことは、近代日本の「身体教育」の根幹を問い直すことにもなるはずだ。

文部省『百科全書』以外にも箕作麟祥は多くの翻訳を手がけたが、彼自身の著作はほとんどなく、

---

(2) 兄ウィリアム(William Chambers: 1800-83)と弟ロバート(Robert Chambers: 1802-71)は、1832年に英国エディンバラでW. & R. Chambers社から *Chambers's Journal* を出版して啓蒙書の普及に成功した。柳田泉『明治初期の文学思想 下巻』(春秋社、1965)では、*Chambers's Information for the People* を『国民須知』として紹介し、その目的を「新時代(産業革命以後の第19世紀)のイギリス人の啓蒙運動に必要な新知識の供給」と説明している。

(3) 文部省『百科全書』には各種異本が現存し編名のゆれもあるが、青史社の復刻版(1983-86)では次の91編としている。全体像をイメージするために、編名を記載しておく。  
「天文学、気中現象学、地質学、地文学、植物生理学、植物綱目、動物及人身生理、動物綱目、物理学、重学、動静学、光学及音学、電気及磁石、時学及时刻学、化学篇、陶磁工篇、織工篇、鉱物篇、金類及鍊金術、蒸気篇、土工術、陸運、水運、建築学、

「教導」から「教育」への改訂の経緯に言及した記録もない。education という概念についての理解が揺らいでいた現実が、やがては「教育」へと収束していったということであろうか。半面はそうかもしれないが、全面的にはそうではないと筆者は考える。

この問題を論じた先行研究には、村瀬勉・早川亜里・田中萬年「百科全書「教導説」の検討——箕作麟祥による「Education」の翻訳がある<sup>(4)</sup>。その結論では「政治的・社会的背景が「教導」と「教育」の混用に対して顕わには影響を与えなかった」とし、「教導説」から「教育論」への変更は、歴史的経緯の中で箕作の視点が「教育」に落ち着いた結果であるとまとめる。しかしながら翻訳研究の観点からは、異なる解釈の可能性も提起したい。近代日本の翻訳語としての「教育」の成立は、「education = 教育」という等価の政治性と無関係ではありえないのである。この点を箕作のテキストから探ってみよう。

「教導説 上篇」における箕作自身による緒言では、本書の章立てを挙げながら全体の内容を概観している。重要なので全文を引用する。

此篇ハ英人「チャンブルス」氏所著ノ百科全書中ニ就キ児童教導ノ説ヲ訳セシ者ナリ即チ通篇分テ六項トス曰ク総論曰ク体ノ教曰ク道ノ教曰ク心ノ教曰ク教導ノ用便ニ備フ可キ物曰ク専門教導及ヒ百工教導而シテ其要旨ハ固ト小学校教導法ヲ概論セシ者ト雖トモ兼テ亦世ノ父母タル者其子ヲ教育スルニ欠ク可カラザル道ヲ弁明セシ書タリ故ニ今之ヲ訳スルモ亦人ノ父母タル者ヲシテ普ク教育ノ要ヲ知ラシムルニ在レハ或ハ原文ノ位置ヲ変易シ或ハ其義ヲ數演シテカメテ鮮シ易キヲ主トシ世人ヲシテ一読瞭然タラシムルヲ欲スト雖トモ訳文ノ体裁自カラ然ル能ハザル者アレバ篇内文詞ノ難渋ヲ免レスシテ読者ノ為メ便ナラザルヲ知ル覧者請フ之ヲ恕セヨ

明治六年初夏

箕作麟祥 識

この緒言においてまず目を引くのは、「教導」と「教育」が混在している点だ。翻訳者の語彙のなかには「教導」「教育」という選択肢があつたうえで、編名としては「教導」を選んだことになる。1871（明治4）年の箕作麟祥訳『泰西勸善訓蒙』においては「教育」が用いられていたのも、この語が当時すでに一般的であつたからであろう。と同時に、彼は違和感を覚えていたのかもしれない。

温室通風点光、給水浴澡堀渠篇、農学、菜園篇、花園、果園篇、養樹篇、馬、牛及採乳方、羊篇、豚兔食用鳥籠鳥篇、蜜蜂篇、犬及狩猟、釣魚篇、魚飼篇、養生篇、食物篇、食物製方、医学篇、衣服及服式、人種、言語、交際及政体、法律沿革事体、太古史、希臘史、羅馬史、中古史、英国史、英国制度国資、海陸軍制、歐羅巴地誌、英倫及威爾斯地誌、蘇格蘭地誌、愛倫地誌、亜細亞地誌、亜弗利加及大洋州地誌、北亜米利加地誌、南亜米利加地誌、人心

論、骨相学、北欧鬼神誌、論理学、洋教宗派、回教及印度教仏教、歳時記、修身論、接物論、経済論、人口救窮及保険、百工儉約訓、国民統計学、教育論、算術及代数、戸内遊戲方、体操及戸外遊戲、古物学、修辭及華文、印刷術及石版術、彫刻及捉影術、自然神教及道德学、幾何学、聖書縁起及基督教、貿易及貨幣銀行、画学及彫像、百工応用化学、家事儉約訓。

(4)『職業能力開発総合大学校紀要 B 人文・教育編』

したがって文部省『百科全書』では、あえて「教導」の語を用いたとも言える。

箕作のこのような使い分けに関して、森重雄『モダンのアンスタンス』（ハーベスト社、1993）は、「教導」を学校の側に、「教育」を家庭の側に留保されたものであるとする<sup>(5)</sup>。かくして「教導説」から「教育論」までの5年間は、「ヴァナキユラーの側に譲渡されていた「教・育」（しかしヴァナキユラーの側はこの言葉をなかなかうけとらない）が、近代学校装置をつうじて〈教育〉のバリエーションへと下位化されつつその編成下に組み込まれた、つまり「植民地化」された、ということ」（140頁）になる。森の指摘は、伝統的な「教育」から翻訳語としての「教育」への転換を鋭く見抜いている。

箕作が緒言に挙げた本書の章立てを原著と対応させて記すと、「総論」（翻訳書のみ）、「体ノ教」（PHYSICAL EDUCATION）、「道ノ教」（MORAL EDUCATION）、「心ノ教」（INTELLECTUAL EDUCATION）、「教導ノ用便ニ備フ可キ物」（MECHANISM FOR EDUCATION）、「専門教導及百工教導」（SPECIAL AND INDUSTRIAL EDUCATION）という6章構成である。これらの章タイトルではeducationの訳語として、「教」と「教導」が用いられている。「教育」という語を知りながら、箕作の翻訳行為には「education = 教育」へのためらいが表出しているのである。physical educationも「身体教育」という二字漢語の組み合わせではなく、「体ノ教」（「からだのおしへ」と読む）という和語なのだ。

「教導説 上篇」の本文では「教導」を「エデュケート」の訳語として紹介し、次のように定義した箇所がある。原文と併記すると、

教導ノ原語タル「エデュケート」ノ字ハ元ト羅句語「エデュカーレ」ヨリ由来スル所ニシテ基本義ハ誘導ノ意ナリ故ニ其字義タルヤ能ク教導ノ旨趣ト相適ヒ而シテ其意ハ元来人ハ其天然粗魯不動ノ者タルカ故ニ必ズ外力ヲ以テ其心ノ能力ヲ誘導シ之ヲ活動セシメテ巧妙ニ至ラシメザルヲ得ザルニ在リ然レトモ教導ノ事ニ就キ確定の識見ヲ立テ又ハ教導ノ法ヲ實際ニ施行スル其良法ヲ撰マント欲スルニハ先ツ明カニ教導ヲ受ク可キ者ノ性質如何ヲ知ラザル可カラズ

The primary meaning of the term *educate*, from the Latin *educare*, to lead or bring out, does not ill express the first great principle of the science. It may be held to assume that the human being is naturally in a comparatively rude and inert condition, and that external forces must be applied to

---

（第35号、2006、1-22頁）。

(5) ただし、この指摘は緒言にのみ当てはまる。村瀬らの前掲論文（9頁）が分析しているように、「教導説」の本文においては、「教導」が学校側、「教育」が家庭側という分類には必ずしもなっていない。

draw forth his faculties into their full activity and power, and bring them to their highest degree of refinement and nicely of application. Before correct views can be entertained with regard to education, or proper steps can be taken for working it out in practice, it is obvious that a distinct notion ought to be attained as to the character of the being to be educated.

原著にはなく箕作が付加した「教導ノ原語タル」や「能ク教導ノ旨趣ト相適ヒ」という説明で、educateは「教導」として了解される。原著によれば、educateはラテン語educareに由来し、leadまたはbring outを意味する。この語源を踏まえたうえで、箕作はeducate/educationを「教導」と訳出したのであろう。

だが、1878（明治11）年に「教育論」と改題されたテキストでは、本文においても「教導」が「教育」に機械的に置き換えられている。次の下線部で示したように、上記の「教導」に単純な修正が施されているのみであり、これならば翻訳者本人による手直しを必ずしも必要としない。この改訂の結果、「教育ノ原語タル」や「能ク教育ノ旨趣ト相適ヒ」によって、educate/educationは「教育」となる。

教育ノ原語タル「エヂュケート」ノ字ハ元ト羅旬語「エヂュカーレ」ヨリ由来スル所ニシテ基本義ハ誘導ノ意ナリ故ニ其字義タルヤ能ク教育ノ旨趣ト相適ヒ而シテ其意ハ元来人ハ其天然粗魯不動ノ者タルカ故ニ必ズ外力ヲ以テ其心ノ能力ヲ誘導シ之ヲ活動セシメテ巧妙ニ至ラシメザルヲ得ザルニ在リ然レトモ教育ノ事ニ就キ確定ノ識見ヲ立テ又ハ教育ノ法ヲ實際ニ施行スル其良法ヲ選マント欲スルニハ先ツ明カニ教育ヲ受ク可キ者ノ性質如何ヲ知ラザル可カラズ

（下線は引用者による）

1872（明治5）年に教部省に置かれた「教導職」からの連想を持ち出すまでもなく、教部省と文部省との合併や分離と「教導」という語とは無関係ではあるまい。文部省との合併が決定されたのを受けて教部卿の嵯峨実愛は、「当省之義ニ於てハ段々評議も有之候処、教導之事も自ら文部省教育ニ関し候儀も有之候間、文部、教部ヲ併セラレ候方便宜も可有之」という文面を含んだ書簡を送った<sup>(6)</sup>。ここで嵯峨は、教部省の「教導」と文部省の「教育」という使い分けをしている。神官僧

---

(6) 国立国会図書館蔵『岩倉具視関係文書』の「宍戸璣・黒田清綱宛嵯峨実愛書簡」。両省の合併問題については、狐塚裕子「明治五年教部省と文部省の合併問題」『清泉女子大学人文科学研究紀要』（第16号、1994、129-156頁）が詳しく論じている。

侶による伝統的な教旨の「教導」と西洋近代を目指す「教育」という二項対立ゆえに、「education = 教育」は西洋思想に基づく国民教育という文脈で社会進化論的な重要性を帯びてくる。

ところで、箕作麟祥は文部省出仕と並行して司法省兼勤であったが、1875（明治8）年には司法省出仕となり、文部行政から司法の分野へと翻訳行為の場を本格的に移していった。以後は、1877（明治10）年に司法大書記官・翻訳課民法編纂課両課長・民法編纂委員兼務、1880（明治13）年に太政官大書記官・法制局勤務、1886（明治19）年に商法編纂委員などを歴任している<sup>(7)</sup>。箕作麟祥不在の文部省における「教導説」から「教育論」への改変は、翻訳者本人の意図よりも、「教育」という語に対する政治的要請が背後に見えかくれる。文部省は「教導」ではなく「教育」という翻訳語を欲望していたのである。学制取調掛の箕作麟祥らによって構想されたフランス式の「学制」（1872）からアメリカ式の「教育令」（1879）への方向転換は、彼の文部省から司法省への異動後であった。

近代国家の国民というフィクションを誕生させるために、とりわけ「教育」は文明開化政策で不可欠である。そして「education = 教育」という翻訳語が要請され、この翻訳の等価が自明化されるなかで、やがては翻訳語であること自体は忘却されていく。

### 3. 翻訳語としての「教育」

「教育」という漢語は古く漢籍に登場する。例えば孟子の『尽心上』には、「得天下英才而教育之」とある。だが、このような儒教的用法での「教育」はその後、中国語では死語同然のものとなり、現在の中国語における「教育」は日本の翻訳語を逆輸入したものと指摘されている<sup>(8)</sup>。日本の辞書では、1866（慶応2）年の『改正増補英和对訳袖珍辞書』に「Educate-ed-ing. 教育ス」「Education. 同上ノ事」、ヘボンの『和英語林集成』では1872（明治5）年の再版から「教育」が登場する。

明治初期には、「教育」を書名に含む翻訳書も数々出版されている。例えば、西村茂樹訳『教育史』（1875）、小泉信吉・四屋純三郎訳『小学教育論』（1877）、石橋好一訳『法国教育説略』（1879）、尺振八訳『斯氏教育論』（1880）、西邨貞訳『小学教育新編』（1881）、添田寿一訳『倍因氏教育学』（1883）、土屋政朝訳『教育学』（1883）、甲斐織衛訳『教育汎論』（1883）、菊池大麓訳『職業教育論』（1884）、橋本武訳『教育汎論』（1884）等々がある。また、1877（明治10）年には文部省『日本教育史略』<sup>(9)</sup>が

---

(7) 大槻文彦『箕作麟祥君伝』（丸善、1907）。 当している。

(8) 王智新「中国における近代西洋教育思想の伝播と変容について(1) —— 1860年から1911年まで」『宮崎公立大学人文学部紀要』（第7巻第1号、1999、41-65頁）。

(9) 1876年のアメリカ独立百年を記念した万国博覧会の出品展示用として刊行した *An Outline History of Japanese Education* を稿本としており、文部省のマレー（David Murray）や大槻修二らが執筆を担

刊行され、同年には教育博物館も開設されている。

社会進化論で著名な英国人スペンサー (Herbert Spencer: 1820-1903) の著作 *Education: Intellectual, Moral, and Physical* (1861) の邦訳が、尺振八訳『斯氏教育論』(1880) や有賀長雄訳註『標註斯氏教育論』(1886) である。この教育論で主張されていたのが、「知育」「徳育」「体育」の三育主義であった。*Social Statistics* (1851) は松島剛訳『社会平権論』(1881-84) としてベストセラーとなり自由民権運動の支柱となったが、このようなスペンサー・ブームも背景にあって、彼の教育論は明治政府の文部行政へと浸透した。

同時期には伊澤修二の『教育学』(白梅書屋、1882-83) も出版されている。伊澤は1875(明治8)年から78(明治11)年まで文部省から派遣されて、アメリカの師範学校などの教育調査に従事した。そのアメリカ留学中にマサチューセッツ州立ブリッジウォーター師範学校で聴講した際のノートをもとに、帰国後に『教育学』として刊行したのである。この著作は日本人による教育学書の嚆矢とされる<sup>(10)</sup>。

伊澤の『教育学』「第一篇 総論」では、「身体上ノ教育即チ体力ヲ育成スルハ体育学ノ専科ニ属スル所ニシテ其目的タルヤ支体ヲ发育シ機器ヲ完成シ以テ精神ノ舍ル所ノ家屋即チ身体ヲ強健ニシテ心力发育ノ基ヲ為スニ在ルナリ」と、「身体教育」つまり「体育」が定義される。当時流行したスペンサー流の三育主義が踏襲されて、「精神上ノ教育」としての「智育」と「徳育」、そして「身体上ノ教育」としての「体育」へと教育が分類されている。さらに「第四篇 体育」には、「体育ノ目的」への言及がある。「体育ノ目的トスル所ハ身体ノ健康ヲ保全シ其发育ヲ助成シテ各部偏長ノ弊ナカラシメ以テ智徳養成ノ基本ヲ作り且支体ノ強力ヲ増加スルニ在リ」という点で、「体育」は「智育」「徳育」の基礎となるものであった。また、巻末には附録として「教育学用語和英対訳分類一覧」も掲載されており、「教育 Education」をはじめとして、「身体上ノ教育即チ体育 Physical Education」「運動 Exercises」「軽体操 Light Gymnastics」「重体操 Heavy Gymnastics」など一連の用語が日本語と英語で列挙されている<sup>(11)</sup>。

---

(10) 村井実編『原典による教育学の歩み』(講談社、1974)の「日本における教育学のはじまり」を参照。

(11) 伊澤修二の教育思想の底流には進化論がある。彼が帰朝直後に出版したのは、進化論を紹介したハクスリー (Thomas Henry Huxley: 1825-95) の講演集の抄訳『生種原始論』(1879) (さらに1889年には『進化原論』として全訳) であった。



#### 4. 明治政府の身体教育

##### 4-1. 文部省『百科全書』と「身体教育」

文部省『百科全書』のなかで「身体教育」に直接関係するのは、「体操及戸外遊戯」(Gymnastics – Out-of-door Recreations)である。翻訳者はオランダ人のカステール(漢加斯底爾)であり、彼は『百科全書』の「戸内遊戯方」(Indoor Amusements)も担当している。2編とも1879(明治12)年に分冊本が出版された<sup>(12)</sup>。「体操及戸外遊戯」は「gymnastics = 体操」と「out-of-door recreations = 戸外遊戯」に内容が二分されるものの、ここでは「体操」と「戸外遊戯」が1冊にまとめられて、「戸内遊戯」とは分離されている点が肝要である。明治期の身体教育への文部省『百科全書』からの影響に関して、木下秀明『日本体育史研究序説——明治期における「体育」の概念形成に関する史的研究』(不昧堂出版、1971)は次のように指摘する。

『百科全書』(文部省、明治12年)に、『体操及戸外遊戯』と『戸内遊戯方』の2冊がみられるように、遊戯という性質から纏めず、運動と非運動的なものという区分が行われている。このように戸外遊戯が体操と一緒にされると、その目的もまた、体操の目的である体育を予想させることとなり、遊戯のうち、戸外遊戯だけが体育法として展開することとなる。(138頁)

書名の示すとおり、文部省『百科全書』では「体操」と「戸外遊戯」が関連づけられており、両者が身体教育の対象となった。1878(明治11)年10月に文部省直轄で設立された体操伝習所の名称とも相俟って、「体操」や「戸外遊戯」を通して国民の身体を教育する「体育」の誕生へとつながるのである。この点は、1885(明治18)年に坪井玄道<sup>(13)</sup>・田中盛業が編纂した『戸外遊戯法 一名戸外運動法』(金港堂)の「緒言」でも窺える。

身体錬成ノ法ハ元来合式体操(軽運動)ノミヲ以テ足ルモノニ非ス又併セテ戸外運動(遊戯法)ヲモ研究セザルベカラズ蓋シ戸外遊戯ノ利益タル筈ニ身体ノ強健ヲ増進スル而己ナラズ亦大ニ心ヲ爽快ニシ優暢快活ノ氣風ヲ養成シ兒童体育上実ニ欠ク可ラザルノ科トス

---

(12) 橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』(風間書房、1998)によれば、カステールのフルネームはAbraham Thierry van Casteelで、1843年にロッテルダムで生まれ、1878年11月9日に日本で病死。したがって、「体操及戸外遊戯」と「戸内遊戯方」は翻訳者カステール没後の刊行となる。

1850-1924)の通訳者でもあった。

(13) 坪井玄道は、体操伝習所の教師としてアメリカから招聘されたリーランド(George Adams Leland:

ここでは「体操（軽運動）」から「戸外運動（遊戯法）」への拡張と、教育としての「児童体育」が注目される。さらに、この「緒言」に先立って本書冒頭に置かれた西邨貞の「戸外遊戯法序」では、欧米諸国の「ナショナル、ゲーム」つまり「国戯」に相当する遊戯が日本にはないこと、そしてそれは「ナショナル、ソング」つまり「国歌」のように「自然ニ産出スルモノ」であるとも述べられている。もちろん、国歌とは自然に生まれるものではなかった<sup>(14)</sup>。国歌としての「君が代」は、「国技館」（1909年開館）で興行される相撲が「国技」と見做されるのと同様に、近代日本による発明なのだから。

#### 4-2. カステール訳「体操及戸外遊戯」における「体操」

文部省『百科全書』の「体操及戸外遊戯」を概観するために、目録とそれに対応するGymnastics – Out-of-door Recreationsの項目を併記してみよう。

体操ノ修練	GYMNASTIC EXERCISES.
指示凡例	General Directions.
体勢及運動法	Positions and Motions.
「インジアンクラブ」	Indian Club Exercises.
「リーピング」法及「ヴァールチング」法	Leaping – Vaulting.
重量搬担ノ術	Carrying Weights.
逍遙及歩走術	Walking – Running.
歩行術ノ習練	TRAINING – PEDESTRIAN FEATS.
郊野ニ遊歩スル少年ノ誠	Advices to Young Men on Walking Excursions.
戸外ノ嬉戯	OUT-OF-DOOR RECREATIONS.
游泳	SWIMMING.
「スケッチング」（氷上ヲ溜行スル法）	SKATING.
氷上溜行術ノ示誨	Practical Directions for Skating.
「カルリング」法	CURLING.

---

(14) 山住正己『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967）では、音楽取調掛の国歌選定事業とその困難について詳述している。

「カルリング」遊戯ノ定則	Laws and Regulations for Curling.
「クリケット」法	CRICKET.
「ゴルフ」戯	GOLF.
弓術	ARCHERY.
「ヤッチング」及「ボーチング」ノ事	YACHTING – BOATING.
「シンチー」及「ハーリング」ノ事	SHINTY – HURLING.
「ファイフス」「ラケットツ」及ヒ「テニス」ノ事	FIVES – RACKETS – TENNIS.
蹴鞠	FOOT-BALL.
「クオイツ」ノ事	QUOITS.

カステール訳「体操及戸外遊戯」では「gymnastics = 体操」について、<sup>ジムナースチック</sup>「体操ハ身体及ヒ筋骨ヲ強壮ニセン為ノ運動」(Gymnastics are those exercises of the body and limbs which tend to invigorate and develop their power.)と定義される。「体操」とは身体を強壮にする「exercises = 運動」であり、ルビで示されたように「ジムナースチック」なのである<sup>(15)</sup>。そして、それは次のように「教育」の対象となる。

是等ノ害ヲ避シ為ニ筋骨軟弱ナル幼童ニハ体操法ヲ以テ教育ノ一部ト為サズンハアルヘカラス  
故ニ間暇アラハ必体操ヲ修練スヘシ

To avert, as far as possible, these imperfections, gymnastics ought to form a part of education in youth, when the joints and muscles are flexible, and time is permitted for the various kinds of exercises.

ここでの「是等ノ害」とは、「体操」を修練しなかった場合のさまざまな身体的な不健康状態を指すが、「体操」を「教育ノ一部」としている点が注目される。そして「体操」に適した場所、服装、時間帯なども続いて指示されていく。

「running = 走術」は、「第十図」に示されているような姿勢となる。これは、上半身と下半身が同期する「ナンバ走り」とは異なり、右足と左手を前に出す身体作法である。

---

(15)ただし、原文では左ルビ。

## 圖 十 第



凡ソ走ルトキハ胸ノ上部ヲ少シク前面ニ托シ頭ハ少シク後面ニ倚ル  
ヘシ何トナレハ前ニ托スル所ノ重量ニ抵抗シテ平均スレハナリ且胸  
膈ハ突出スルニ任スヘシ肩胛ハ正クシテ動カサルヲ要シ手臂ノ上部  
ハ体ノ両側ニ密接シ肘ハ曲ケテ鋭角度ノ形ヲ為シ [...]

The upper part of the body is slightly inclined forward; the head slightly  
thrown backward, to counteract the gravity forward; the breast is freely  
projected; the shoulders are steady, to give a fixed point to the auxiliary  
muscles of respiration; the upper parts of the arms are kept near the  
sides; the elbows are bent, and each forms an acute angle; [...]

また「歩く」(walkingの訳語としては「逍遙」)という基本的な身体動作は、「体術ノ習練及兵卒ノ操練」(gymnastic or drill exercises)に必須の要素となる。教育訓練なくしは正しく歩くことさえできないのであった。

緩徐或ハ厳正ナル体勢ニテ逍遙スルコトハ体術ノ習練及兵卒ノ操練ニ於テ実ニ欠クヘカラサル  
術ナレハ必習熟スヘシ天然伶俐ニシテ自ラ能ク逍遙歩走ヲ為ス者ハ甚稀ナリ

The art of walking with ease, firmness, and grace, forms a necessary part of gymnastic or drill  
exercises. Few persons walk well naturally.

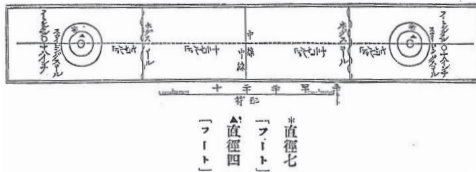
ちなみに、1872(明治5)年の学制では教科名として「体術」が用いられていた。これが翌年には「体操」となり、第二次世界大戦中に「体練」、そして戦後には「体育」という学校教育の科目になった経緯は周知のとおりである。

### 4-3. カステール訳「体操及戸外遊戯」における「戸外遊戯」

カステール訳「体操及戸外遊戯」では「体操」にはじまり、「歩く」や「走る」という身体の基本的な動作が説明された後、「戸外ノ嬉戯」としてゲームの「スポーツ」のルールが詳細に紹介さ

れる。とりわけ「curling = カルリング」、「cricket = クリケット」、「golf = ゴルフ」について、非常に詳細な記述があるのが特色である。部分的に抜き出しておこう。

圖 六 十 第



[curling]

此遊戲ハ各々對手ノ黨ヲ為シテ行フモノナリ而シテ此技ヲ做スノ日ハ各人円形ノ堅石直径凡ソ九「インチ」ナル者ヲ携持スベシ其石ノ下面ハ匾クシテ平滑ナサシメ上面ハ鼻紐ヲ着ケ置クベシ

The game is played by a party forming rival sides, each individual being possessed of a circular hard stone, of about nine inches in diameter, flat and smooth on the under side, and on the upper, having a handle fixed to the stone.

[cricket]

此遊戲ハ他ノ技ニ勝レテ少年輩ニハ殊ニ良キ戯トス而シテ此技ヲ行フニ耳目聡明意氣快速ニシ且体軀快爽ニシテ能ク動クトキハ甚タ欣慰ナルモノナリ此戯ハ草ヲ短ク刈リタル広野ノ平坦ニシテ砂石又ハ灌木ナキ場所ニ於テ為ス可シ

This is one of the best of all out-of-door sports for youth. It requires quickness of mind and eye, great agility of limb, and, properly conducted, is highly exhilarating and amusing. The game is played on an open, well-shaven green, which is level, and free from stones or shrubs.

[golf]

「ゴルフ」ハ専ラ蘇格蘭民間ノ戯ナリシカ近年「リンクス」ノ近所ニ住メル人ハ貴賤ノ別ナク皆之ヲ玩ハサルモノナシ蘇格蘭ニテ「リンクス」ト唱フルモノツウィード河ノ南ニ於テハ「コンモン」ト呼フ此ハ此戯ヲ奏スルニ欠ク可カラサルモノナリ但シ「リンクス」有ル処ニハ「ゴルフ」ノ戯無キヲ得ザルニ至レリ

Golf is one of the principal national Scottish pastimes, and has of late years become a favourite amusement with all classes who are fortunate enough to reside near *links*. Links, or, as they are termed south of the Tweed, commons, are indispensable for the pursuit of this recreation, and it may be stated, as a rule, that wherever links occur in Scotland, there also occurs golf.

杉村武の前掲書では、「訳者の変りだね」としてオランダ人のカステルを簡単に紹介した後に、「わが国でゴルフについて数頁をついやり詳しく紹介したのは「体操及戶外遊戯」が最初であろう」(157頁)とコメントしている。

近代スポーツのルールが書記言語で明文化された背景には、19世紀英国のパブリック・スクールにおける教育イデオロギーの成立がある。クリケットやフットボール（サッカーとラグビー）などの集団スポーツが人格陶冶のために用いられたのだ。他校との対抗試合に必要な共通ルールが整備された。そして、ジェントルマンとしてのエリートを育成するためのパブリック・スクールで生まれた「アスレティズム」(athleticism)という教育イデオロギーは、やがて世紀末にかけてのボーア戦争をはさんだ帝国主義と連動する形で過熱していった<sup>(16)</sup>。集団競技で培われる協調性や男性性に基づく英雄崇拜と相俟って、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」<sup>(17)</sup>というような身体壮健の思想は、戦時においては帝国主義ゲームに勝利をもたらす資質へと接合されたのである。

## 5. 翻訳語としての「身体教育」の行方

1875（明治8）年9月の『文部省雑誌』第16号には、小林儀秀訳「米国ボストン教育新聞紙抄」に「身体教育」が登場する。ただし、physical educationが「身体教育」という定訳になっていたわけではない。当時の他の訳語としては、先述した文部省『百科全書』の箕作麟祥訳「教導説」における「体ノ教」、あるいはスペンサーを翻訳した尺振八訳『斯氏教育論』で「体軀ノ教育」とした例などもあった。いずれにせよ「身体教育」という翻訳語そのものは一般的な用語として普及しなかったが、「体」と「育」を組み合わせた「体育」として定着して今に至っている。

文部省の初代文部卿は大木喬任、そして文部大丞として出仕したのは田中不二麿である。田中は岩倉米欧使節の理事官となって随行したが、この使節団の目に留まりアメリカから招聘されたのが

---

(16) 村岡健次『近代イギリスの社会と文化』（ミネルヴァ書房、2002）の「第4章「アスレティズム」とジェントルマン——19世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて」を参照。

(17) 古代ローマの風刺詩人ユウェナリス (Decimus Junius Juvenalis: 60-130) の一節 “orandum est, ut sit mens sana in corpore sano” が出典であるが、本来の意味から歪曲されて軍国主義的に誤用された。

デイビッド・マレー (David Murray : 1830-1905)であった。マレーは1873(明治6)年6月から1881(明治14)年7月まで日本に滞在し、文部省の最高顧問である文部省学監として文部行政に影響を及ぼした御雇外国人である(この時期、彼の通訳を務めたのは高橋是清)。1879(明治12)年には教育令が施行されて学制が廃止となるが、この新しい教育令はアメリカ人マレーの主張する自由主義教育を基調としたものであった。

来日後間もないマレーが、1873(明治6)年12月に田中不二麿(この時は文部大輔)に宛てた「学監米人博士ダウキッド、モルレー申報」『文部省第一年報』(142丁)では、次のようにスペンサー流の三育主義が説かれていた。

蓋国家平安ノ極度ニ至ルハ人民ノ教育ニ在リ故ニ教育ハ政府至大ノ職業ト言ヘシ元来人民身体ノ康寧知識ノ敏捷修身ノ完全等皆教育ニ因テ成ルモノナリ今其理ヲ説カンニ教育ハ人材ヲ陶冶スル基本ニシテ勉テ人ヲシテ其身体ヲ運動シテ健全ヲ得セシメ且能ク人ノ智ト道トヲ開発ス夫智識有テ能ク事物ヲ興シ道理有テ能ク善悪ヲ弁シ体力有テ能ク之ヲ施行ス故ニ此三者完全ナレハ即チ是教育ヲ受ケタル人ト云フヘシ

マレーは「教育」の対象を「身体」「知識」「修身」とし、身体の運動を奨励した。1878(明治11)年には体操伝習所が設立され、アーマスト大学からリーランドが来任し、体育教師の育成が始まる。体操伝習所での身体教育の具体的な方針は、アメリカ留学帰りの伊澤修二を中心に展開されることになった。

伊澤は1875(明治8)年から3年間アメリカに留学し、帰国後には東京師範学校長、体操伝習所主幹、音楽取調掛長(のちに東京音楽学校初代校長)、文部省編輯局長(教科書検定制度を実施)などを歴任した。日本の近代的学校教育における「体育」や「音楽」という科目の揺籃期に、活力統計という身体検査や遊戯「蝶々の歌」を学校現場に導入したのも彼であった。近代的な身体や唱歌と体操伝習所や音楽取調掛のかかわりを考えれば、文部官僚としての伊澤の存在は大きい。その後の伊澤は、日清戦争後には台湾総督府民政局の学務部長心得に就任し、国民の身体と唱歌へのまなざしは領土を拡張していくことになる<sup>(18)</sup>。

---

(18)伊澤修二の生涯全般については上沼八郎『伊澤修二』(吉川弘文館、1988)、特に洋楽受容史との関連では奥中康人『国家と音楽——伊澤修二がめざした日本近代』(春秋社、2008)に詳しい。

さて、体操伝習所での「普通体操」には、もうひとつの「体操」が後に加わることになる。それは、1885（明治18）年に初代文部大臣に就任した森有礼が推進した「兵式体操」である。すでに森は1879（明治12）年、東京学士会員例会で「教育論——身体ノ能力」について演説し、日本人の身体改良を力説している。富国強兵の気運が高まるなかで、1883（明治16）年に改正された徴兵令では、「現役中殊ニ技芸ニ熟シ行状方正ナル者及ヒ官立公立学校（小学校ヲ除ク）ノ歩兵操練科卒業証書ヲ所持スル者ハ其期末タ終ラスト雖モ帰休ヲ命スルコトアル可シ」（第2章12条）と、中等以上の教育での「歩兵操練」を規定したことなどに森の政策が反映されている。1886（明治19）年の学校令公布以降は「普通体操」とともに、「兵式体操」が並行して学校体育で実施されることになったが、その前年には「歩兵操練」という軍事教練から「兵式体操」という身体教育へと名称が変更されていた。次第に体育教員には軍関係者が多くなり、学校での身体教育において「兵式体操」が強化されていった<sup>(19)</sup>。

兵式体操という身体教育とともに積極的に用いられたのが、西洋音楽の音階（七音音階）を基調にした唱歌教育である。そして学校教育においても歌われた軍歌は、俗歌の追放という唱歌教育の課題に合致した<sup>(20)</sup>。文部省の方針は、「高等小学校男生徒ニハ兵式体操ヲ課スルノ際軍歌ヲ用キ体操ノ氣勢ヲ壮ニスルコトアルヘシ」<sup>(21)</sup>であった。明治期の軍歌は、1894（明治27）年に開戦した日清戦争以来にわかに流行したが、大日本帝国初の本格的な対外戦争での戦意高揚に利用されたばかりでなく、巷に西洋的な韻律が浸透する契機ともなったとされる。学校という身体教育の制度は、兵式体操と軍歌を組み合わせることで、国民を近代的身体へと調教したのである。当時の社会進化論や優生学的な文脈のなかで、例えば高橋義雄の『日本人種改良論』<sup>(22)</sup>などが主張したように、日本人種の劣性なる身体は西洋人という理想の他者へと改良可能な対象として再定義された。

日清戦争に先立つこと数年、1890（明治23）年の「教育ニ関スル勅語」（いわゆる「教育勅語」）は、1948年に廃止されるまで半世紀以上にわたり、学校行事の基本的な規範であった。さらに1911（明治44）年の朝鮮教育令や1919（大正8）年の台湾教育令は、植民地での教育行政全般の基本となっていた。このような「教育」は臣民へと下賜される規範であり、箕作麟祥訳「教導説」で定義されていた「エデュケート」の原義からは乖離してしまったことになる。翻訳語としての「教育」は、儒教的概念に仮託してeducationとの等価を虚構した。

---

(19) 岸野雄三・竹之下休蔵『近代日本学校体育史』（日本図書センター、1983）。

(20) 田甫桂三編『近代日本音楽教育史II』（学文社、1981）。

(21) 「文部省訓令第6号」『官報』（第3354号、1894年9月1日）。

(22) 高橋義雄は時事新報の記者であり、1884（明治17）年に著された本書の序は福澤諭吉による。



## 6. 翻訳された身体活動

### 6-1. 体操、運動、スポーツ、体育

確認しておくと、「physical education = 身体教育」つまり「体育」は明治期に成立した翻訳語である。近代日本の身体を規律・訓練した「education = 教育」とともに、国民の身体を近代的なそれへと文明化した活動としての「gymnastics = 体操」「exercises = 運動」「sports = スポーツ」も翻訳語である。

現代の私たちにとっても、「体育大会」「運動会」「スポーツ大会」はいずれも特別な身体活動の催事であるし、そのような場への参加者は「体操服」「運動着」「スポーツウエア」などを着用する。また、「国民体育大会」の英訳はNational Sports Festivalであるが、これは「日本体育協会」（英名：Japan Sports Association）が開催地都道府県や文部科学省（英名：Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology）と共催する国民の身体活動であり、「スポーツ基本法」（旧「スポーツ振興法」）に定められた行事である。ここでは「体育 = sports」が成立しているし、文部科学省は「education = 教育」「culture = 文化」「sports = スポーツ」「science = 科学」「technology = 技術」という夥しい翻訳語から構成された行政機関であることが解読される。

翻訳語は重なりながらも、ずれていく。例えば、「運動」不足を解消するために「スポーツ」ジムに通ったり、「体育」会が「運動」クラブの団体であったりする。だが、「体育」教師がラジオ「体操」を教えることはあっても、天体「運動」については定かではないだろう。「体操」「運動」「スポーツ」「体育」という翻訳語は、相互に近似的なものを指標できる一方で、原語との狭間で意味が微妙にずれている。

### 6-2. 「運動」の二面性

明治期の日本で「運動」という翻訳語が一般的になる過程において、「運動会」の成立を看過することはできない。近代日本において運動会が成立した過程では2つの系譜があった、と木村吉次「明治政府の運動会政策」は指摘する<sup>(23)</sup>。海軍兵学寮の「athletic sports = 競闘遊戯」と体操伝習所の「体操演習会」は別々の契機で始められたものである。1874（明治7）年の海軍兵学寮では、イギリス海軍顧問教師団のダグラス中佐（Archibald Lucius Douglas: 1842-1913）を中心にして、競技性の強い種目（徒競走、競歩、跳躍など）と娯楽性の高い種目（二人三脚、障害物競走、豚追い競

---

(23) 吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己・紙透雅子『運動会と日本近代』（青弓社、1999、129-155頁）。

争など)から成る競闘遊戯会が開かれた。この系譜には、1878(明治11)年の札幌農学校や1883(明治16)年の東京大学での運動会などが入る。他方、体操伝習所では、1881(明治14)年と翌年に体操演習会が実施されている。ここでは軽体操などが披露されて、参観した教育関係者への普及が図られた。この系譜には東京体育会の大演習会など、運動方法の実演とその啓蒙活動が含まれる。つまり、「運動」会には「スポーツ」と「体操」の系譜が共存することになるのだ。

いずれの系譜にせよ、このような運動会という装置は、国民の身体を文明化する出来事であった。競闘遊戯会も体操演習会も、どちらも西洋化された身体活動を集団的に展覧する新しい催事(近代日本の祭事)であったことに変わりはない。

しかも、このような運動会の形成過程には、明治政府による「運動」の奨励と抑圧という二面的な政策が関与する。就学意欲を高める展覧の場での学校教育の可視化が奨励されながらも、政治的意味の過剰としての自由民権「運動」への取締りが強化された時代でもあったのだ。したがって「書生運動会」(壮士運動会)は禁止され、弾圧された。

さて、1905-06(明治38-39)年に発表された夏目漱石『吾輩は猫である』の第7章冒頭、「吾輩は近頃運動を始めた」という一文は、「猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合いに一寸申し聞けるが、さう云ふ人間だつてつい近年迄は運動の何物たるを解せず、食つて寝るのを天職の様に心得て居たではないか」と続く。「吾輩」にとつての「運動」とは、「西洋から神国へと伝染した輓近の病氣」のようなものでもあった。

小森陽一は、この『猫』における「吾輩」の「蟻螂狩り」や「鼠狩り」という暴力的な「運動」を帝国主義戦争の文脈において、「運動」という名の殺戮<sup>(24)</sup>として分析する。そして、「運動」という翻訳語の射程に、movement、motor、momentum、mobility、sport(s)を含める。movementには物体の空間的移動ばかりでなく、目的達成の活動としての政治運動や学生運動も入ってくるし、motorは生理学的あるいは解剖学的な運動神経、momentumは運動量、mobilityは運動性なのだ。さらにsportは遊戯的な「運動」であるばかりでなく、「突然変異」というダーウィニズムの鍵概念でもあるという。

### 6-3. 「スポーツ」という概念

19世紀の英国社会で進化した近代の「スポーツ」は、野蛮な暴力行為を排除した娯楽的な身体

---

(24)小森陽一『漱石論』(岩波書店、2010、35-54頁)。

競技である。古代ギリシャの格闘技では相手が死亡するまで勝負は着かなかったが、文明化された文化装置としての「スポーツ」では肉体は行使するが、その競争は非暴力的でなければならない。エリアスの「スポーツと暴力に関する論文」では、次のように述べている<sup>(25)</sup>。

2、3世紀前に「スポーツ」(sport)という言葉はそのより古いかたちである「遊び」(disport)という言葉とともに、さまざまな娯楽や楽しみを意味するものとしてイギリスで使われた。[...]時がたつにつれて、「スポーツ」という言葉は、肉体の行使が重要な役割を果たす娯楽の特殊な形態——イギリスで最初に発達し、そこから世界中に広がったある種の娯楽の特殊な形態——を意味する専門用語として標準化された。(217頁)

日本語の「スポーツ」は言うまでもなく sport(s)の音訳である。つまり、この概念と等価となる翻訳漢語は現在でも成立していないのだ。それゆえに「sports = スポーツ」という現象は、「体育」や「運動」などと交錯する。

多数の近代スポーツ、とりわけ19世紀英国のジェントルマンが生み出したルールに則った競技スポーツが、明治時代の日本に紹介されて普及した。ただし、それら個々の競技の総称は「スポーツ」ではなく、当初は「(戸外) 遊戯」「(戸外) 運動」と呼んでいた。木下秀明の前掲書は、「体育」「運動」「遊戯」の混用を sport の概念から説明する。

明治30年代にみられる“sport”の概念の邦訳について、その傾向を纏めてみると、一部には、運動教育を意味する体育とは無関係に、スポーツの特質に注目して、大人の高度の遊び技であることを示す表現法を創造しようとする傾向が見られる。しかし、その主流は、運動教育を意味する体育の手段として展開した「運動」、「遊戯」などの「体育」的語感の強い表現を使用する傾向によって占められている。(262頁)

sport という概念に相当する日本語はなかったが、当初は「スポーツ」というカタカナ語の使用には向かわなかった。文部省『百科全書』の「体操及戸外遊戯」でも、「sports = スポーツ」は一

---

(25) ノルベルト・エリアス／エリック・ダニング『スポーツと文明化——興奮の探求』（法政大学出版局、1995、217-252頁）。

度も登場しない。国語辞書における「スポーツ」という単語は、1891（明治24）年の『言海』では立項されず、1932（昭和7）年の『大言海』でようやく「スポウツ 戸外遊戯、屋外運動競技」と説明されるに至る。このような「スポーツ」の欠如が、「体育」と「運動」が同義的に使用される一因となったのであろう。

## 7. おわりに

運動会を近代の「マツリ」としたのは、吉見俊哉「ネーションの儀礼としての運動会」である<sup>(26)</sup>。そして彼は言う。「運動会は、明治日本に導入された近代の〈台本〉が〈演出〉されていく過程と、この国の人々が育んできた日常的実践、すなわち〈パフォーマンス〉が交差し、せめぎあいながらも接合していく地点に誕生し、矛盾をはらんだ社会戦略的な場として発達してきた」（10頁）と。そうであれば、その台本がどのような言葉で書かれていたのかという視点を加えてもよいだろう。

明治期の日本では、physical educationから「身体教育＝体育」が誕生して、国民の身体が「教育」された。「体育」という「教育」制度は、明治政府による日本人の身体の国民国家化であった。その意味で、「education＝教育」という翻訳語の成立は重要である。だが箕作麟祥訳「教導説」から「教育論」への工作が見えない手によってなされたように、翻訳の等価は恣意的な虚構であり、原義からのずれは隠蔽されてしまう。

本稿では、身体の「教育」が「体育」として誕生する時代のなかで、文部省『百科全書』の「教導説」と「体操及戸外遊戯」という翻訳テキストに出現した翻訳語を契機として、身体教育という近代を再考した。「ジムナースチック」とルビが付された「体操」には、やがて「普通体操」と「兵式体操」が包摂され、sportsの意味を代替した「運動」が政府の抑圧と奨励の対象となった明治期に、近代日本の身体は「教育」によって規律・訓練されたのだった。そして大英帝国に起源をもつ数多くの「スポーツ」は、「運動」「体育」「体操」という翻訳語としての近代日本語と共鳴しながら、今もなお私たちの身体を文明化し続けている。

---

(26) 吉見俊哉ら前掲書（7-53頁）。